

heisei16

六花

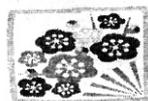
Rikukwa haikukai

1

晦目そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

designed by Asuka

訪戴



山田六甲

佐藤熊耆先生九十五歳永眠

年の瀬や百歳にあと五つと瀬
秋落暉中学校のガラスにも
剥けば手に滑る熟柿や子規をふと

つけものは京に限ると年忘れ
極月や美味しいものを食べたいね
雪女抱かれて松にもどりけり
流れ弾ほどなる河豚をいただきぬ
ハム食んで年の瀬の坂越えにけり
メモリーを増やせば雪のちらつきぬ
木枯に粘りの強きボールペン
木枯は池の鯉から吹いて来し
木枯の痛いところを突きにけり
木枯やたばこを吸ひに外へ出て

開明や日本盛やお正月
播州の大吟醸に初日の出
興居島こごしまのみかんに海の詰まりゐる
メル友の俳句上達大晦日
還暦はいやな言葉よ御元日
元日の松抱いて酔さましゐる
君も僕も私も還暦お正月
酒持つて来いとは闇鍋の誘ひ
紙三度切れば八枚お年玉
正月や芭蕉三百六十歳

六卿集

RIKUKESHU

(五十首順送り)

十五夜

鳴海清美

息を飲む知らせ十五夜明かる過ぎ
イマジンの曲流れある良夜かな
忌ごもりに十六夜の雲底びかり
幻聴にあらず夜明けの鉦叩
秋分の風に乗りたる鳩の羽根

火星

二瓶洋子

右へ折り左へ折りてすすきかな
コスモスの庭に雉鳩猫もある
雨雲に意気満ちて鳴く秋蛙
病む人と粥の相伴秋日和
秋冷のきらめいてゐる火星かな

すでに過去

松山律子

デパ地下は折れて曲がって歳の市
初日待つこの瞬間はすでに過去
知らん間に年とついている三が日
その一手に待ったが掛かる初将棋
プラットにベル鳴り響く草城忌

旅ごころ

中村房枝

舌のばす貝と私と大晦日
初東雲や金沢に川二つ
極樂のごとき退屈お元日
ぐい呑の底のぞき込み乙字の忌
寒紅やひと日ひと日を旅ごころ

人形に涙のあとや後の月 志方章子

後の月少し歪に上りけり

おしやべりに忙しき人小春空

忍び足して鶴鴿に近づきぬ

ほどほどに人ゐる秋の御苑かな



事実の真ではなく
文芸の真を句にした
と解釈すればよい。
もし事実のことなら
ば、それはそれは怪
談話後の月になるで
あろう。御苑の句も
佳い。

橙木集

同人自選

順不同

草堂斬西無樹林

非子誰復見幽心

飽聞橙木三年大

与到溪辺十畝陰

杜甫

曼珠沙華

松下 幸恵

からす瓜兄弟結ぶつる強し

群れ萩や雄岡雌岡の山の坂

十三夜無沙汰を詫びるふみを書く

山間に白亜の学舎曼珠沙華

からみ合ひもつれ合ひ秋深まりぬ

石庭

松本文一郎

石庭の阿件の石組秋の翳

南西にあれは火の星水の秋

新涼や蓋の開きたるインク壺

蝸の今日の命と鳴きにけり

盆灯籠金釘流の警世句

六花集

会員自選

射場 智也

少年になつて見てゐる秋の草
長き夜や普段どおりに猫の来て
枝先を萩咲かせをり零ぼしをり
秋しぐれ家より高き垣根かな
鶏頭のとうとう消えてしまひけり

林 裕美子

鳥川 昌実

かき氷ほんの三口に目をつむる
側にいるそれしかできず藍の花
星月夜床屋帰りの細き眉
小さき事きつちりと終えて秋涼し
待合のポスター見尽くし秋の末

シヤラシヤラと米とぐ音や夜の秋
新米を掬うてのひら薄すぎる
罽雲海へ向かつておりにけり
曼珠沙華色褪せながら崩れざる
この路地の奥に木犀あるらしく

菜根譚



六甲

待合いはいろいろな待合い室があるだろう。例えば髪の毛の伸びている人は美容室の待合いを想像し身体の調子が今ひとつの人は病院の待合いを、旅行好きな人は駅かバス停の待合いを思い起こすなど、立場によって自らに引きつけて読むのだ。れだけこの句の幅が広いと言ふことであり、広がりを持つている句ということになる。

長き夜や普段どおりに猫の来て 射場 智也

秋の夜長の暇をもてあましているのだろう。それとも作者は、夜長を読書や用事を片づけているのだろうが、気が付いてみるといつも来る猫がいつものとおりに訪問してきたという句。なるほど作者は猫のことを普段通りにと詠んでいるが、実は作者が普段通りの平凡で穏やかな夜を過ごして居ることを詠んでいるのである。